

平家物語『忠度の都落ち』定期テスト対策問題 | 現代語訳・掛詞・文学史の頻出設問と解答 解答・解説

問1 どこから（引き返して）お帰りになったのだろうか。／「られ」＝尊敬、「けん」＝過去推量。語り手の推測を交えた書き出し。

問2 その場の様子は、なんとなくしみじみと感慨深い。／「何となう」は「何となく」のウ音便。敗走の身で師弟が対面する場面の情趣。

問3 死後、草葉の陰（あの世）からでもうれしいと存じますならば。／「草の陰」＝墓の下・あの世。死を覚悟した忠度の言葉。

問4 決していいかげんに扱おうとは思いません。／「ゆめゆめ～まじ」＝決して～ない（強い打消意志）。「まじう」はウ音便。

問5 今となつては、西海の波の底に沈むなら沈め、山野に屍をさらすならさらせ、（もう）この世に思い残すことはございません。／歌を託し終えた忠度の晴れやかな覚悟。

問6 行く先の道のりは遠い。（わが）思いを、雁山にかかる夕べの雲に馳せることだ。／漢詩文の一節（『和漢朗詠集』所収の句）を朗詠したもの。別れの感慨を漢詩に託した。

問7 「行く」の尊敬語。語り手（作者）から忠度への敬意。

問8 尊敬の助動詞「す」連用形＋尊敬の補助動詞「給ふ」＝二重敬語（最高敬語）。会話文中なので、話し手の忠度から、動作主である聞き手・俊成卿への敬意。

問9 安徳天皇。天皇の動作だから、「さす」＋「給ふ」の二重敬語（最高敬語）で最高度の敬意を表している（話し手は忠度）。

問10 「与ふ」の謙讓語（差し上げる）。動作の受け手である俊成卿への敬意（語り手から）。

問11 「言ふ」の尊敬語。語り手（作者）から忠度への敬意。／武人でありながら高貴な歌人として遇されている。

問12 丁寧語。会話の聞き手である俊成卿への敬意。／忠度の発言が終始でいねいな対話体であることを示す。

問13 係り結び。「や」（疑問）を受けて文末「けん」が連体形で結ばれている。「けん」＝過去推量（～ただろうか）。

問14 「沈ま」（未然形）＋「ば」＝仮定条件（もし沈むなら）。それに命令形「沈め」を重ねた放任法で、「沈むなら沈め（かまわない）」と成り行きに任せる強い覚悟を表す。

問15 (1)結びは「給ふ」（連体形）。(2)使役の助動詞「す」連用形。直前に「馬にうち乗り」とあるので、馬を歩ませなさる、と使役にとるのが標準的（尊敬とする説もある）。

問16 断定の助動詞「なり」已然形「なれ」＋接続助詞「ば」＝確定条件（原因・理由）。「勅勘の人であるので」。

問17 尊敬（の助動詞「る」）。動作主の忠度への敬意。／受身・可能との識別が頻出。

問18 枕詞。「志賀」を導く。／「さざ波（の・や）」は近江国・志賀にかかる枕詞。

問19 掛詞。志賀の地名「長等（ながら）山」と、「昔のまま（昔ながら）」の意とが掛けられている。

問20 （さざ波や）志賀の都はすっかり荒れてしまったけれども、長等山の山桜は、昔のままに美しく咲いていることだなあ。／「にしを」＝完了「ぬ」連用形＋過去「き」連体形＋逆接の「を」。「かな」＝詠嘆。

問21 天智天皇が置いた近江の大津宮（大津京）。壬申の乱ののち荒廃した旧都に、戦乱で滅びようとしている平家の都（平安京）と一門の運命が重ねられている。

問22 読み＝おちうど。意味＝戦いに敗れて逃げ落ちていく人。／忠度一行を指して屋敷内の人々が言った言葉。

問23 勅撰和歌集の編纂（のちに俊成が撰んだ『千載和歌集』のこと）。／その完成前に世が乱れ、沙汰がなくなっていた。

問24 歌道の師である俊成卿に、自分が生涯詠みためた歌の巻物を託し、世が静まって勅撰集が編まれるとき、一首なりとも入集させてもらうことを願うため。

問25 忠度は朝敵として勅勘（天皇のおとがめ）を受けた人であったため、名前を出すことができず、作者名を伏せて入集させるしかなかったから。

問26 語り手（作者）の心情。朝敵となった以上やむを得ないとはいえ、すぐれた歌人の名を出せなかったことを残念に思う、忠度（平家の人々）への深い同情。

問27 鎌倉時代成立の軍記物語。盲目の琵琶法師が「平曲」として琵琶を弾きながら語り、広めた。／冒頭「祇園精舎の鐘の声」に象徴される無常観が全編を貫く。

問28 (1)七番目。(2)藤原俊成。(3)藤原定家。／俊成一定家親子は文学史の超頻出ペア。